

回復期リハビリテーション病棟における専従社会福祉士の役割 ～アンケート調査による実践研究～

浜松市リハビリテーション病院 医療福祉相談室○小泉 若菜

内田美加、野崎静恵、田村ひでみ、原江美、岡本亜希子、齋藤佳苗、原内菜実、鈴木智香

要旨

2014年度診療報酬改定において、回復期リハビリテーション病棟入院料1に「体制強化加算」が新設された。当院では、2019年2月から在宅復帰支援を担当する専従の社会福祉士が配置され、1年が経過したため、今までの業務を見直し、今後の課題について検討しようと考え、アンケート調査を実施した。結果、他職種・同職種ともに専従の社会福祉士配置の前後で変化を感じる一方、求める役割には温度差を認めた。今後については、病棟内の役割を明確化していく必要があると考える。

1 目的

専従の社会福祉士の業務のあり方と今後期待される役割、他職種・同職種に求められる専従の社会福祉士像を比較し、今後の業務に役立てる。

2 方法

2019年12月24日から2020年1月7日の期間、専従の社会福祉士が所属している病棟在籍の他職種役職者職員（医師・看護師・リハビリテーション部）19名と相談室内の退院支援に関わる同職種職員（MSW・在宅支援室Ns）11名にアンケート調査を実施。回収率は97%だった。

アンケート項目は、回復期リハビリテーション病棟協会ソーシャルワーカー10 箇条と病院機能評価 付加機能評価リハビリテーション機能（回復期）を元に作成し、当院倫理委員会の承認を受けた。

3 結果

① 他職種の回答

・専従の社会福祉士配置前後の変化を「感じている」が81%で、内容は「MSWと話す機会が増えた」55%、「退院支援がスムーズになった」50%であった。

・専従の社会福祉士に求める役割は、「病棟でいつでも相談できる」「社会資源の情報提供」77%が多く、「退院後のフォロー」16%、「病棟全体の把握」22%が少なかった。

② 同職種の実務経験者の回答

・専従・専任業務を行った前後で変化を「感じている」が83%で、内容は「退院支援について責任感が増した」66%、「他職種から話しかけられる機会が増えた」50%であった。

③ 同職種全体の回答

・日頃の業務内容は、「患者・家族の思い・ニーズの把握」90%、「退院支援」81%であった。

・専従の社会福祉士に求める役割は、「チームコーディネート」100%が多く、「社会資源の情報提供」「退院後のフォロー」9%が少なかった。

4 考察

専従の社会福祉士が配置されたことで、スタッフ間でのコミュニケーションが増え、退院支援がスムーズになったと感じていることがわかった。しかし、医師に関しては、変化を感じていると答えた人が看護職・リハビリ職よりも少なかったため、更なるコミュニケーションの必要性があると考えられた。

専従の社会福祉士に求める役割については、他職種が社会福祉士に対して、社会資源の情報提供を行っているというイメージが強いことがわかった。しかし、社会福祉士は、患者・家族の抱えている課題に対して、権利擁護の立場から総合的かつ包括的に関わり、必要に応じたサービス利用を通じて、その人らしい自立生活を営むことができるように支援する役割である。社会福祉士の役割をもっと他職種に周知できるような活動を行っていかなくてはならないと考察した。

5 まとめ

今回は専従の社会福祉士が配置された前後での変化を確認することができたため、今後も他職種とのコミュニケーションを積極的に図っていききたい。

また、今後は患者・家族へのモニタリングを通じて利用者からのフィードバックを活かしつつ、専従の社会福祉士としての役割を明確化していきたい。